
勝川春章筆《美人鑑賞図》の制作背景 ー先行図様と実景を中心にー

江戸時代中期に活躍した浮世絵師、勝川春章（1726～1792）による《美人鑑賞図》（出光美術館蔵）は、作者の晩年にあたる寛政年間前期に制作された肉筆画である。69.4×123.2cm という横長の大きな画面一杯に透視図法を用いて建物が描かれ、前景には横に並んだ11人の美人たちが掛幅を取り出して鑑賞する様子が、後景には広大な庭園がとらえられている。

春章の寛政年間の作品を概観すると、背景描写の簡略化により全体を人物と少数のモチーフのみでまとめようとする傾向が現れており、《美人鑑賞図》はその点で同時代の作例の中では特異な存在である。本作品についてこれまでの先行研究では、三枚続の版画作品と類似することが度々指摘されてきた。画中の場面については、春章の支援者であった柳沢信鴻が隠居した六義園が題材となっていること、また六義園の古図とは一致しない部分があるため、実際に目にした実景を踏まえながら構想を織り交ぜて描かれたことが内藤正人氏によって指摘されている。本発表では、三枚続のような典型的な構図を取る《美人鑑賞図》においてどのように実景表現が施されているのか、その制作過程を考察し、そこから浮かび上がる本作の位置づけについて提示したい。

まずは春章が《美人鑑賞図》を描くにあたり、鳥文斎栄之による《福神の軸を見る美人》（大判錦絵三枚続）という具体的な作品を参考にしていただくと指摘したい。《福神の軸を見る美人》には、掛幅を鑑賞する美人の群像や透視図法を用いた建物表現、さらに火灯窓や衝立、牡丹といった《美人鑑賞図》と同工のモチーフが描かれており、本作の発想の源泉として用いられたことが確認できる。細部に描き加えられたモチーフも、本作以前の春章作品中に確認できることから、美人を中心とした空間は既存の図様の組み合わせによって構成されているといえる。

一方で庭園描写に目を向けると、栄之の作品からは大幅な変更が行われている。特殊な形状の石組や盗人返しのついた塀、陰影のついた樹木が描き加えられ、春章の肉筆画には珍しい透視図法が利用されていることと合わせて、画中の空間に現実感を与えようとする意識が見受けられる。すなわち《美人鑑賞図》は、既存のイメージを下敷きに美人画の形式をとりながら、具体的な実景表現を新たに描き加えることで庭園画としての要素も取り込んだ二重の構造をもつ作品であるといえる。

加えて春章が独自に描き入れた鶴や猫、蝶といった図様は、本作品に吉祥画としての役割も与えている。実景表現にさらなる機能を付与する手法は、江戸時代における大名庭園を描いた作品が、写実性に優先して和歌や古典文学の世界観を重ね合わせる手法を取り入れたことと共通すると考える。そこで、本作品を複合的な意味世界を備えた作品とし、浮世絵における風景表現をもつ美人画、および江戸時代における庭園画の流れの中で位置づける。